

◆2021年7月第3週の説教

■日時：2021年7月18日（日）

■場所：立川教会

■説教題：「神の愛から、私たちを引き離すことはできない。」

■聖書：新約ローマの信徒への手紙8：31-39（p285）

■讃美歌：529「主よ、わが身を」・536「み恵みを受けた今は」

お早うございます。

皆様、お元気ですか？

健康は守られていらっしゃいますか？

今日は、コロナに関わる前置きの話しは無しにして、早速聖書の御言葉からの学びを始めたと思います。

ローマの信徒への手紙第8章31節からです。

5月2日（日）から始めたローマの信徒への手紙の講解説教ですが、今日をもって全体の前半が終わり、8月からは後半に入ります。

昨年度取り上げたマルコによる福音書は、1章を2回に分け、16章全てを読み通して学んでまいりました。全部を読み通したわけですから、本当に丁寧な学びが出来たと思います。

ところで、今回取り上げているローマの信徒への手紙は、各章ごとに、パウロが語る重要と思われる箇所を選んで学んでいます。マルコのように全部に目を通していません。しかし、マルコとは違った学び方ですが、パウロの信仰をしっかりと受け止めて行きたいと思います。パウロによる世界伝道なくして、私たちがキリスト教に出会うこともなかったのですから。

さて、この間、パウロが語る言葉は一貫しています。

先週取り上げた第7章もそうでしたが、今日の箇所も、パウロの確信に満ちた信仰告白が語られています。31節です。

31 : では、これらのことについて何と言ったらよいだろうか。もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。

神様がわたしたちの味方である。

パウロの信仰を貫いている確信です。

しかし、それはどのようなことを意味しているのでしょうか？

物事についての私たちの判断や、行動の全ては、それがたとえどのようなものであっても、神様によって義しいと認められると言うことでしょうか。

もちろんそうではありません。

先週学んだパウロの言葉を思い出さなければなりません。

パウロは、自分のことを次のように自覚しています。

第6章24節です。

24 : わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたし

を救ってくれるのでしょうか。

パウロは、自分とは、何と惨めな人間かと言うのです。

そして、死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのでしょうかとまで言っています。

これが、パウロの自分に対する理解です。

しかし、このように嘆きつつ、パウロには確信がありました。

たとえ私がどれほど惨めな人間であろうとも、神様は私の味方であると。

これは、一体、何を意味しているのでしょうか。

パウロは、何を言いたいのでしょうか。

24 節に続く 25 節でも、パウロは同じ内容を重ねて言っています。即ち、自分は、心では神の律法に仕えているが、肉では罪の法則に仕えていると。

罪にまみれている自分、罪の奴隷となり、罪の縄目に絡め取られている自分です。

心では、神様に従いたい、神様に喜ばれる自分でいたい。

それにもかかわらず、現実の生きている自分、肉の自分は、罪の法則に仕えてしまっている。

常識で考えるなら、このように自分を理解する時、そこには自分への絶望しかありません。

まさに、自分は何と惨めな人間なのかとの自責の念です。

でも、パウロは違います。

そのような現実を抱えているにもかかわらず、神様は、自分の味方であると言うのです。

欲する善は行わず、欲しない悪を行ってしまう、そのような自分の力では救い難い己れであることを誰よりも深く自覚しつつ、それでもパウロは心の内から抑えることの出来ない信仰の言葉を語るのです。

「神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか」と。

パウロにこの言葉を語らしめるもの、それは、神様の恵みに対するパウロの確信でした。

パウロは語ります。32 節です。

32：わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。

神様の愛をパウロは知っていました。

その独り子であるイエス様を、十字架に架けて死に渡された神様の愛をです。

そして、その死によって自分の罪は赦されたことをです。

主イエス・キリストの十字架。

それこそが私たちの罪を覆うものであり、神様の私たちに対する究極の愛を示すものであることを知っていたのです。

パウロにとって、イエス様の十字架と復活の出来事は、すでに成就したことであり、パウロを始めとして全ての人の罪は赦されたと言う事実をパウロは知っていたのです。

だからこそ、たとえ自分が罪の奴隷となっていようとも、神様の恵みはすでに私たちに与えられ、その罪は赦され、罪の縄目から救い出されている事をパウロは知っていました。

そしてその恵みは、一人パウロに向けられているのではなく、私たち全てに向けられています。御子をさえ惜しまずに死に渡される神様の愛と恵み。

そのような愛を、私たちは想像出来るでしょうか。

私たちに与えられた救い主であるイエス様の、十字架の死がどのようなものであったのかを知るために、その予表として理解されているイザヤ書 53 章 3 節から 5 節を、新共同訳ではなく 1955 年改訳の聖書から読んでみたいと思います。

3：彼は侮られて人に捨てられ、

悲しみの人で、病を知っていた。

また顔をおおって、忌みきらわれる者のように、

彼は侮られた。われわれも彼を尊ばなかった。

4：まことに彼はわれわれの病を負い、

われわれの悲しみをになった。

しかるに、われわれは思った。

彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。

5：しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、

われわれの不義のために砕かれたのだ。

彼はみずから懲らしめをうけて、

われわれに平安を与え、

その打たれた傷によって、

われわれはいやされたのだ。

このイザヤの言葉に比べるべくもありませんが、それでも、肉親の痛みがどれほどのものであるかを知った経験があります。その経験は、この場で何回か話したことがあるので、覚えていらっしゃる方もいると思います。

その経験とは、長男が高校生の時のことでした。

ある日、突然、夜寝る時に、彼が自分の布団を私の部屋に持って来たのです。

何が起きたのかと驚きました。

小学生ならともかく、高校生です。

高校生の長男が、一人で寝るのが辛くて、私の部屋で一緒に寝ると言うのです。

その理由が分かりました。彼は、その時失恋をし、その痛みと苦しみに耐えきれず、私の部屋で眠ろうとしたのでした。

しかし、私がお話ししたいのは、その時の私の経験です。

彼は、なかなか眠れずにいました。

そして、何度も何度も布団の中で深い溜息をついていました。

辛そうな、苦しそうな溜息でした。

すると、どうしたことか、私の中で、彼のつく溜息に合わせて心が痛むのです。

まるで、自分の苦しみのように、心が辛く、痛むのです。

イエス様の十字架の苦しみは、神様の苦しみでもありました。

その痛みは、神様の痛みでもありました。

そして、その痛み、苦しみは、パウロに絡みつく罪の枷を打ち砕き、私たちに虜にしている罪を、その縄目から解き放つものでした。

33 節です。

33：だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義としてくださるのは神なのです。

選ばれた者たち。

それは、キリストの十字架と復活を知らされた者たちです。

訴えると言うのは、有罪の宣告を求めることです。

しかし、キリストの十字架と復活を知らされた者たちは、たとえ有罪の現実を生きていたとしても、キリストの十字架によって、その罪は贖われ、神様によってすでに義とされています。

だからこそ、34 節です。

34：だれがわたしたちを罪に定めることができます。死んだ方、否、むしろ復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成し

てくださいるのです。

罪の支払う報酬としての死を打ち破り、神様によって復活させられた主イエス・キリストは、その十字架の死と復活によって神様の右に座し、来るべき最後の審判の場において、私たちの罪を執り成し、救って下さいます。

その事実を知らされている私たちに対し、35節です。

35：だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができます。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。

すでに、私たちの罪に対し、その赦しは宣言されました。

罪の赦しは成就されています。それを信じる時、赦しは現実となります。

主イエス・キリストの十字架は、私たちの罪の闇を追い払い、私たちを恵みで包みます。このキリストの愛から、神様の愛から、私たちを引き離すものがあるとすれば、それは何でしょうか。

自分自身に問いかけるのです。

私を信仰生活から、教会生活から遠ざけるものはあるのかと。

36節には、

36：「わたしたちは、あなたのために

一日中死にさらされ、

屠られる羊のように見られている」

と書いてあるとおりです。

とあります。

しかし、私にはこのような経験はありませんでした。

14歳から60年に及ぼうとする信仰生活、教会生活は、神様の守りの内に在ったと思います。

しかし、これから先の人生の歩みの中で、パウロや世の多くの先達たちが経験した艱難、苦しみ、迫害、飢え、裸、危険、剣が襲って来る時、それでも37節のパウロの言葉を自分の言葉として語り得るかどうか。即ち、

37：しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛して下さる方によって輝かしい勝利を収めています。

とのパウロの言葉をです。

そして、38、39節にある、パウロの心の内から迸り出るキリスト賛歌、即ち

38：わたしたちは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、

39：高い所にいるものも、低いところにいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。

との告白です。

今日示されたこれらのパウロの信仰の言葉を、共に告白する者になりたいと思います。

祈りましょう。